北関東３県から250人が参加

優秀販売店など表彰

読売販売六部所長会議

読売販売第六部所長会議では表彰式が行われた

読売新聞東京本社販売第六部は11月27日、栃木・鬼怒川温泉ホテル三日月で平成26年度所長会議を開催した。同社販売第六部は北関東3県7読売会（群馬東部、群馬西部、栃木南部、栃木北部、茨城北部、茨城中部、茨城南部）から構成され、当日は会員ら約250人が出席した。読売本社からは宮本友丘取締役副社長・販売担当、黒澤幸常務取締役販売局長、池田和暢同局次長、佐藤渉販売第六部長、小林忠同次長らが、報知新聞社からは下川原耕一執行役員販売局長、野島達朗販売第二部長が参加した。

所長会議では、永年取引（50、40、30、20年）表彰、独立協力賞、年間優秀賞、新人賞、新店賞、年間目標達成賞、中高生新聞表彰、行動のレベルアップ賞、YC防犯活動表彰、通年コンクール上位スタッフ表彰が行われ、受賞者は黒澤常務や佐藤部長、池田局次長、竹村章七日会長から壇上で表彰状を受け取った。

朝日新聞の報道をめぐり

良識ある判断求める

全販売店に文書を送付

千葉県新聞組合

千葉県新聞販売組合（降籏久雄組合長＝中志津・読売）は11月度の役員会で、朝日新聞の誤報、記事の取り消し問題などを受け、「販売という立場で新聞に携わる一員として、謙虚に対応していかなければなりません。また、販売現場にあってはことさらに強調することにより信頼を損ねるような営業活動は絶対に避けなければなりません」と呼びかけた申し合わせ事項を、文書に作成、県内全店に送付した。また、問題が起きたら現地店主会で解決を図るよう促している。

こうした問題では東京都新聞販売同業組合が10月度に「朝日新聞の報道に対するキャンペーン」で販売現場が系統間の無用の軋轢を生じせしめないよう、本社側に指導を求めるなど、緊急の措置を講じている。

千葉県内新聞販売について申し合わせ事項のお知らせの要旨は次の通り。

◇

昨今の朝日新聞による過去の記事の誤報また記事の取り消しは、日本国内において多くの人々がそれぞれの件に関して意見を述べる結果となりました。

しかし、日々多くのニュースを掲載して発行される新聞にとって、あってはならないことですが、このような事態は常に起こりうる可能性を含んでいます。

私たちは新聞の販売という立場で新聞に携わる一員として、謙虚にこのことを受け止め、対応していかなければなりません。

また販売現場にあっては、このことをことさら強調することにより、新聞の信頼を損ねるような営業活動は、絶対に避けなければなりません。

今後はこのような事態が散見された場合は、各支部において現地店主会を開催し問題解決を図るようお願いいたします。現地店主会の開催の内容については事務局までご報告ください。

全県下の各販売所長の良識ある判断と、ご協力をお願いいたします。

おくやみ

小澤　健一氏（長野県飯山市大字飯山　小澤新聞店所長）1日9時22分、脳幹血栓で死去、53歳。通夜は2日、告別式は3日、同市大字飯山のセピアホール樋口で。喪主は妻・千絵さん。

阿部　英司氏（岩手県一関市末広2　阿部新聞店・阿部たい子所長の夫）11月28日死去、73歳。通夜は2日、告別式は3日、同市赤萩のセレモニーホール清花堂会館で。長男・英春氏。

連載　ミャンマーレポート③

真剣さに心打たれる

深刻な労務難の時代に対応するため、「アジア最後のフロンティア」と言われるミャンマーへと人材を求めて降り立った首都圏の新聞販売店所長たち。今回はいよいよ採用希望者たちとの顔合わせだ。（上田）

面談にのぞむ生徒たち。はにかんだ笑顔に誠実さがにじみ出ていた

第３話「面談」

採用希望者たちとの面談はヤンゴン市内にある国営の職業訓練所内の会議室で行われた。ここは研修生などの資格で海外へ出る生徒が技術を学ぶ場として使われており、敷地に立ち並ぶ建物の中には旋盤などの機械が並んでいた。

今回、面談する採用希望者は16人。TOKYO ONE日本語学校の生徒のほか、提携するRAKHITA（ラキータ）という日本語学校の生徒も同時に面談することとなった。進行役はダニエル企画・成暻哲（ソン・ギョンチョル）代表とTOKYO ONE日本語学校の小澤京子校長が務めた。

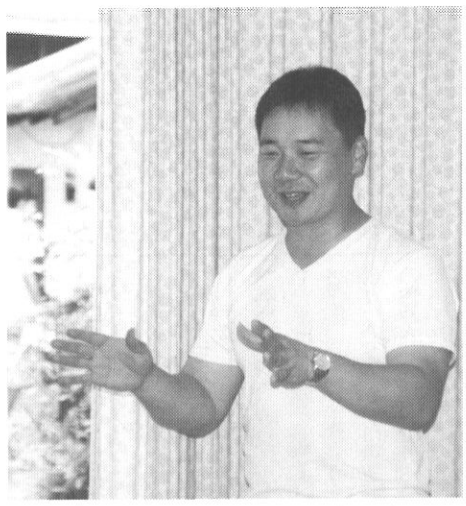
志望者たちは一人ずつ所長らの前に立ち、自己紹介を日本語で行う。日本語のレベルは人によってばらつきがあり、通訳できるレベルの生徒から日常会話もおぼつかないレベルまでさまざまである。

しかし皆に共通しているのはその真剣な面持ちだ。よく見ると緊張で足を震わせながら話す生徒もいる。

成氏は「この日のために一生懸命頑張ってびっくりするほど上達した子もいる。そういう努力には報いてあげたい」と話す。

確かにまだ習いはじめて3カ月という生徒もいたが、かなりきちんとした日本語を話していた。やはりこの日のために特訓していたのだという。

志望者の中で一番日本語が堪能だったチャン・ミャエくん（25）は「勉強も仕事も頑張って、ゆくゆくは日本の大学で農業を学びたい」と期待に胸を膨らませる。他の志望者たちの質疑応答の際に通訳を務める場面もあり、「日本にいくのが楽しみです」と笑っていた。



「努力する子には報いてあげたい」と話す成氏

日本への留学で膨らむ成功への夢

ほとんどの志望者は大学や専門学校の卒業生だ。志望理由は「日本語を勉強して将来に備えたい」、「日本で学び、ミャンマーに帰って会社を始めたい」などさまざま。アジア圏で中国とともに経済大国としての存在感を示す日本に留学し、日本語を習得するということは将来の成功が約束されるということと同義なのかもしれない。日本とミャンマーとの結びつきが政治的にも経済的にも今後どんどん強まっていく期待感とともに、彼らの夢もますます膨らんでいくのだ。

「中国と違い日本が自由主義国家だということも大きいのでは。民主化して一度自由の良さを知ってしまったこの国は、もう軍事政権に戻ることはできないと思う」小澤さんはそんなこともつぶやいていた。

成氏は「今の時点で日本語のレベルがまだ業務を行うには足りない生徒もいるが、これから来日するまでの間に私も手伝いながらさらなる特訓を行う予定だ。日本語は習いはじめた最初が一番大変。もともと能力の高い子たちだから、あるレベルまでいけば一気に業務が出来るレベルまで上達できるはず」と強調していた。

まだ見ぬ後進へ繋げていく自覚を

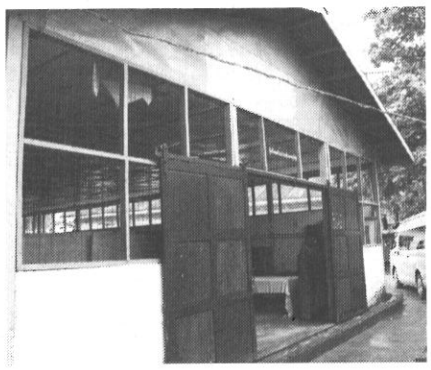
「みんな、とても緊張していたけれども、今の時点で言葉の上手い下手は関係ない。みんながいま一生懸命やった結果が良くなれば、きっと来年、再来年、あなたたちの兄弟や後輩たちへと繋がる架け橋となる」

そうやって面接後に志望者たちへ声をかける人物がいた。今回の面接会を企画したG氏である。日本国内で外国人受け入れを検討している新聞販売店に対するアドバイザーとして成氏に協力している。新聞販売業界全体が抱える労務難という問題について何かできることはないか、考えた上での決断だった。

G氏は「成くんとは古い付き合いなので協力しようと思った。いずれは新聞業界だけでなく、あらゆる分野で外国人の労働力が必要になる時代が来るかもしれない。日本の将来を見据えた上での協力でもあるんだ」とビジョンを語る。

「日本語は日本に来てちゃんと勉強して1年もすればわかるようになる。ただ、君たちがまだ知らない、たくさんの後進の人たちに繋がっていくんだ、ということを一人ひとりが自覚を持ってやっていってほしい」G氏がそうやって呼びかけ、一人ひとりと固く握手を交わすと、志望者たちの表情はますます真剣味を増しているように見えた。

面談の時は緊張の面持ちだった



面談が行われた職業訓練所

真剣さに心を打たれた店主たち

面接を終えた所長たちの感想もさまざまだ。

E所長は「面接で彼らの真剣な目つきや向学心を感じ、改めて彼らを受け入れるということの責任の重さを感じた。彼らはただの労働力ではない。彼らの人生を預かるような取り組みなんだと思う。だから店に戻ったら今一度フォロー体制について従業員とも話しあってもっと意識を変えないといけない」と話す。

またミャンマーに来るまでは正直あまり前向きではなかったというB所長も彼らの真剣さに心を打たれた一人だ。「今回はいい意味で誰が来てくれてもいいなと思った。やはり実際に会って顔を見てみないと分からないことはあるね」。

またC所長も「面接で真面目さや緊張感、真剣さなどを感じられたのは良かった」と評価する。「この国の人は穏やかというか、のんびりした国民性があるように感じるが、今日見た彼らには強い目的意識がある。その『欲』にかけてみたい」と気持ちを新たにしていた。

これまでも外国人留学生を積極的に受け入れてきたF所長は「自分の店では今まで常に一人は外国人留学生がいる状態にしてきた。これまで在籍した留学生たちも店のマスコット的存在として地域のお客さんにかわいがってもらってきたので、ミャンマーから来る子たちもそうなればいいね」と話す。また、「ミャンマーの子を受け入れるにあたって、われわれが両国の架け橋としての役割を担っていきたいという気持ちや、取り組みの趣旨をチラシにして地域のお客さんに周知しようと思っている。そうやって自分の店だけでなく地域の皆で支えてあげられたら、日本での生活が大変だったとしても『来てよかった』と思ってもらえるのではないか」と語っていた。

一方で「正直、1回会っただけでその子がいいのか悪いのかは本当の意味ではわからない。これは日本人でも同じことが言えるけれど、ましてや外国の人だからね。だから基本的にバックグラウンドも含めた人選については成さんや小澤さんを信頼してお任せするしかないんだ」とD所長は冷静な視線を崩さない。

彼は自店ですでにミャンマー人の留学生を一人受け入れており、現場の苦労や課題についても実感しているのだった。

×　×

次回は外国人留学生受け入れの課題と展望について、議論します。